

回想する終戦の日、そして流転

神奈川県 平 勉

終戦から半世紀。終戦の日を境として、自分の周りで何が起こり、その中にどのように巻き込まれていったか、を回想してみたい。

一、渡満の経緯

一家が満州国の撫順市に居住し始めたのは、昭和四年七月である。両親は、共に大分県宇佐郡の出身である。遠縁に当たる呉藤という方が、昭和初期に撫順に住み付き、豊職人として成功を収めていた。父は、呉藤様の口利きもあって、満鉄撫順炭礦工事事務所に就職する機会を獲得するのである。

当時の満州は、まだ日本人が安心して住めるほど、治安が保障されているわけではなかった。日本国内では、大正九年四月の金融恐慌に端を発した景気低迷が、長期間にわたって尾をひき、日本人の海外派遣を後押

しするかの様相を呈していた。

当時、父が三十一歳、母は二十二歳の若さである。兄が四歳、私は満二歳であった。

二、回想する終戦の日、そして流転

暑い日だった。一九四五年八月十五日。哈爾濱学院南寮の二階大広間に、学生全員が集合した。正午、玉音放送を聴いた。太平洋戦争の終結が告げられた。

寮の七号室に戻って、しばらくは放心状態であった。どの部屋も、同じく静寂であった。「やっと終わったんだ」「これからどうなるのだろうか」だけれど、行く末を案じて茫然としていた。

私は、八月九日にラジオ放送を聴いて、ソ連の参戦を知った。日ソ不可侵条約は、既にソ連によって一方的に破棄されていた。私は、寮内の炊事当番を担当していた。野口和雄君も当番の一人であった。

八月十九日、厨房に突然の知らせが届いた。渋谷三郎学院長が、奥方と御子息を連れ立って自決された。裏庭に置いてある棺を学院長宅へ持参するように、というのである。得体が知れない恐怖が全身を包んだ。

なぜ、学院長は、非業の最期を選択されたのであろうか。私どもは、棺を担いでひたすら駆けた。

私どもは、静粛に寝室へ入った。学院長と奥方が、ベッドを並べて安らかに目を閉じておられるのが目に入った。枕元には、一挺の拳銃があった。隣室では、学院長の御息が、両親と末期を共にされていた。私は、その健気な姿に接して胸が詰まった。私どもは、故人の葬送をやり遂げてから、それぞれが南寮の自室で冥福を祈った。

八月二十三日、白井学監と家族の姿が見えない、と大騒ぎになった。全員が手分けして寮内外を丹念に捜し回った。私は、偶然、先輩と共に三階の屋根裏に入った。真つ暗闇に目が慣れて全体を見渡すと、学監の姿を確認した。拳銃でこめかみを撃ち、自決を図ったことを目前にして愕然とした。頭部の側に紙切れがあるのに気付いた。薄明かりにかざして読んだ。「一万が一、死に切れないときは、武士の情で殺してくれ」と、書き留めてあった。学監の体を板に乗せて階段を下り、廊下に安置した。先輩が「よし、学監を楽にさせてあ

げよう」と言うなり、学監の体の上に馬乗りになり、胴絞めにした。それまで、かすかに唸り声を発していた学監が、やがて、静かに永遠の眠りに付かれた。学生たちは学監の体の回りを取り組んで合掌した。奥方とお子さまたちは、直後に、部屋の中で見付かった。服毒自殺である。

明けて二十四日。二階の部屋に残っていた山内五郎君と相談した。連れ立って南寮を脱出する決意を固めた。そのころ、寮生は、目立って減少していた。お互いが明確な行き先を持たず、思い切って日本人の住宅に飛び込もうと決めた。寮の裏門を出た二人は、たちまち五〜六人の中国人に囲まれつかまった。腕時計などを略奪され、待機中の荷馬車に乗せられた。馬車は二頭立てなので速い。街の郊外に向かって走っている。私は山内五郎君と小声で打ち合わせ、機を見て逃げることにした。

馬車を飛び下りた二人は、一気に走った。満州人二〜三人が後を追ってきた。双方の脚力の差は歴然としている。四〜五十メートルを走って、後を振り返って

みると、追っ手は諦めて馬車に引き返して行った。寮の裏門の近辺まで戻って、二人は路地を入って一軒のドアをノックした。表札には「金子」と日本名が書かれていた。そこには既に先客として学院生が身を寄せていた。南寮七号室の義沢先輩と黒羽栄司君である。

金子さんの御一家は、御主人が軍隊に召集されて留守家族であった。

金子家に救われ、予期せぬ仲間との再会までも果たし、二人は落ち着きを取り戻し、活力が復活してくるのを感じた。奥さんや子供さんたちと談話をしたり、遊んだりしながら、二三日がアツという間に過ぎ去った。ハル濱市街はソ連軍による戒厳令が施行され、加えて、日本人狩りがあり、随所で被害が発生している、と近所の主婦が情報を与えてくれた。そんなある日、ソ連軍の将校が兵卒一人を伴って巡回してきた。義沢先輩が応対した。将校に対して「私どもは学生であり、戦争責任を負う立場ではない。毎日を不自由に生活している。せめて自由に外出ができるように『特別通行証』を発行してもらえないものか。どうか、尽力して

いただきたい」と、立場を説明し要望を伝えた。将校は、話を聞き終わると、「証明書を発行してくれるように頼んでやるから、第四軍司令部を訪問しなさい」と言い、その主旨を名刺の裏に記述して先輩によこした。先輩はその文面を入念に読み返した。文面に納得した先輩は、将校に対して鄭重にお礼を述べた。四人は、有頂天であった。疑う者は一人としていなかった。

早速、金子さんに事情を説明し、お別れの挨拶と感謝の意をねんごろに伝えた。第四軍司令部は、サポール（中央寺院）の中に設営されていた。司令部へ向かう四人は、足取りが軽快であった。司令部に到着すると、義沢先輩が、将校から預かった名刺を差し出した。「ここで待機するように」と言われて、期待に胸を膨らませて、衛兵が再び現れるのを待った。程なく、衛兵が戻ってきた。「ダワイ、シュター」いよいよ、証明書発行の手続が始まるものと思われのままに彼の後に続いた。そのとき、どうも様子がおかしいと感じた。オフィスへ通じる道ではない。

ガチャーン、と音を立てて重いドアが閉められた。

何ということだ。私どもは、完全にはめられたのである。だまされたのである。部屋には、数十人の日本人が留置されているではないか。だれもが、不安と疲労のため寡黙である。あがきが取れないのが実態である。留置者の大半は、ソ満国境近くの開拓団から逃げ延びてきた人、日本人狩りによって拉致された人に違いない。私どもに後悔はなかった。一〜二時間が経過したころ、全員が再び戸外に引き出された。隊列を組んだ避難民の列が歩き始めた。一時間余りを歩いて、私どもは、哈爾濱郊外の小さな香坊駅の広場に到着した。広場は結構な広さである。そこには、既に数千人を超えらると思われる群衆が蝟集^{いしじ}していた。紛れもなく、日本人の集団である。阿修羅のいたずらか、それともたわむれか。これほど大勢の罪の無い日本人を窮地に追込む意図は何なのか。私どもは、密集の中に透き間を捜して座り込んだ。人間は、このような環境に置かれると、したり顔をして、憶測を述べる者に、耳を傾ける節がある。その中心人物は、計ったようにペシミスト（悲観論者）である。

一人の男が、しゃべり始めている。「天皇陛下が、皇居内で自決されたそうだ。われわれは、ここから、ウラジオストック経由で、シベリア送りになるらしい」彼は、決して断定を下しているわけではない。私は、周囲の流言飛語には、努めて耳を貸さないように心に決めた。所詮^{しよせん}、根拠の浅い作り話の域を出ないからである。ポジティブで、挑戦的に生きるしかないのである。数時間が経過して、出発命令が下った。賽^さは投げられた。

集団が、数十人単位の各グループに分けられた。グループごとに、整然と進んで無蓋列車に分乗させられた。列車内は、鯨詰めの満員である。改めて、列車内には、婦人、娘、子供、老人が存在することを確認した。列車が出発してから数十分が経過した。私の当て推量では、列車が東南を目指していると思った。安危は紙一重である。ウラジオストックの港から、日本の船舶に乗船して、日本へ強制送還される可能性が考えられる。

各列車には、ソ連軍の警備兵が一人配置され、護送

の任に当たっている。列車は風を切り、黒煙を吐き出しながら、満州の大原野を轟進した。警備兵は、肩から自動小銃を下げて、退屈そうに立っている。時折、野兎が、一匹、二匹と原野を跳ね回っているのを見掛ける。学院生のひとりが、冷やかし半分に警備兵をけしかけた。「自動小銃で、あの兎を撃てるかな」と。

警備兵は、躊躇なく、小銃を小脇に構えて発射した。ダ、ダ、ダ、ダ、ダー。連発される銃弾は、ことごとく的を外した。兎は悠々閑々として、走り去る列車を見送っていた。

ハ爾濱を出発した列車は、途中で二度停車して海林駅に到着した。ハ爾濱から海林までは、二百三〇四キロの距離である。その先五〇六十キロには、牡丹江の街がある地点である。牡丹江市は、関東軍にとって、戦略的に重要な要所であった。「ここからは、下車して歩行に移る」という指令が伝わってきた。この地点まで来て、なお、私どもには、明確に行く先を知らされていないのである。不安は更に募る一方である。お腹はすき、喉が乾いている。赤ちゃん、子供が、母親

にせがんで激しく泣いている。母親は、必死に泣き騒ぐ子供の手を引く張り有めるが、子供は聞き分けがなくなっている。恐らくは、家を飛び出し逃避する際に、幾日分の食料を持ち出したとしても、長い道中で、食べ尽くしてしまったのに相違ない。哀れに思うがどうする術もない。

やがて、道路が山坂を越える地形に差し掛かってきた。これまで晴天に恵まれてきたが雲行きが怪しくなっている。勾配のきつい坂道が延々と続いている。集団の列から遅れ、遠く引き離されると御陀仏になってしまう。氣力を振り絞って、前進するしか方法はない。そのうち、「休憩」の指令が下った。道端の枯れかかった草花や、松の葉を揉んで紙切れに巻き込み、タバコの代用として吸っている者がいる。死人のようにごろりと横になって寝ている者もいる。先程の子供連れの母親は、一体どうしているのだろうか。どうにか集団の中に付いていると良いが……。考えてみれば、無蓋列車の固い板の上に何時間も揺られ、床ずれの痛みが激しくなっているかもしれない。乳が出なくて困り果て

ているかもしれない。不穩なことではあるが、赤ちゃんらが、既に死亡していると仮定しても不思議ではない。

二、三十分が経過したころ、「出発」の号令が耳に響いた。避難民たちは、疲れ切つて、重い足を引きずつて歩いた。険しい上り道に直面する度に、決まつて数人が落伍した。道端に倒れ込んだまま動かない姿が目立つてきた。「俺の死に場所は、ここではない」厭わしい気持ちを励まし、鼓舞しながら前進した。なだらかな傾斜を下る途中に、半狂乱になって泣き叫んでいる婦人を見た。子供が死亡したのである。周りが押さえて、平静を取り戻すように説得している。隊列の最後尾が通り過ぎてしまうと、極めて危険である。私どもは、ためらう気持ちを振り切り、後ろ髪を引かれる思いを断ち切つて、歩き続けた。

日は既にとつぷりと暮れている。幸い、隊列は長い山坂を踏破して、平らな野原が広がる所に差し掛かっていた。用便を催したくなると、休憩の時間までは待たずに、隊列を離れて道端の草むらの中に走り込む。辺りが暗くなつてきたので、女性の姿が、目立ってい

る。異性間の羞恥心は平時に比較すると、かなり微弱になつてゐる。野原の中を一、二時間は歩いたと思われる。前方を行く隊列から、順次、こちらに指令が伝わつてきた。ここで夜明けまで休憩することになった。夏場の夜明けは早い。道路上でごろりと横になつた体に睡魔が襲い、アツという間に深い眠りに入つてゐる。

「出発」の声に目を覚ますと、東の空が明るんでいる。誠に平和を謳歌する日は、いつになれば再現するのだろうか。野原の彼方には、農家の部落が点在しているのが見える。飢えをしのぐために、手取り早く水が欲しい。部落が近づき、通り過ぎて行く目前に、農民たちが手に手に、鎌や鍬を構えて、日本人を罵倒する光景を見た。とても飲み水を恵んでもらえるような雰囲気ではない。

程なく、前方に大きな川が流れている所に到着した。避難民に対して、食物を支給する、と伝達が届いた。左右の手の平を合わせるように広げて、赤い高粱を受け取つた。高粱は、生のままではとても食べられない。川の水で洗い、器にいれた上から適量の水を加

え、これを煮て食べるのである。幸い哈爾濱郊外に集結した折に、ソ連軍から一人一人に対して、缶詰を一個ずつ支給されたので、その空き缶を腰に結び付けて持ち歩いていた。広い河原を砂利を踏みしめながら歩いてみると、反対側から大勢の関東軍兵士の捕虜が、隊列を組んで戻ってくるのに擦れ違った。

ふと、その隊列の中に、撫順中学校の先輩の顔を見付けた。辺見さんという人で、私の兄と同級生である。私は反射的に彼の名前を呼んでいた。「辺見さん！ 辺見さんじゃありませんか」先輩は、立ち止まって私の顔を見た。「おお、平君じゃないか。どうしたんだ」と質問を返してきた。お互いに長い話は禁物である。気が焦る二人は無事を確認し合い、急いで隊列に戻って行った。

集合場所ではあちらこちらに、焚き付けに火を起し、高粱粥を煮る異様な臭いが立ち込め始めている。平時には中国人でさえ、めったに食べることはない代物である。飢餓に瀕すると、何でも食べられることを思い知らされた。川の水を腹いっぱい飲んだ。脱水

症状に陥るのを避けなければならない。塩気の無いそばその高粱粥を腹の中に流し込むと、空きっ腹が満たされて、やや落ち着きを感じた。

困難な状況を踏破した大多数の避難民は、夕暮れ迫る牡丹江市街地に到着した。市街を見渡すと、日ソ両軍の激戦が展開したのか、それとも、ソ連軍の一方的な砲火による被害なのか、主要なビル、建物は、あちらこちらで倒壊して、無残な姿をさらけ出している。隊列は分かれて、半焼、半倒壊のビルに押し入れられた。学院生が所属する一隊は、砲火によって屋根が落ち、青天井を仰ぎ見るビルの一隅を割り当てられた。あとで分かったことには、この一帯は、元日本陸軍病院の焼け跡である。

今夜はこの場所を塹^{ぼり}にして宿泊することになった。人々は一斉に外へ駆け出した。外とは言っても、ドア、窓はことごとくガラスが破損しているので、内から外が丸見えの素通しである。用便をする姿が否応なく目に入る。男女の区別は、既に捨て去っている。幸い、外は裏庭のような形態をした所である。奥行きは、十

メートルほどの広さである。明かりが無いので、足元を十分に注意して歩かないと、他人の脱糞を踏みつけることになる。それにしても、汚臭には悩まされ通しである。深夜だと思われるのに、だれかが起き出して用便に駆ける。大方の避難民が、ひどい下痢をしているのである。部屋の片隅から、かすかに押し殺すような女性の嗚咽の音が聞こえてくる。

捕虜の身となつてから、既に一カ月以上が経過したような錯覚を起こす。その実、まだ一週間未満なのに……。類例が無い体験を通して、根性、意気地を備えた人間に成長しつつあったのかもしれない。辛酸をなめることは、人間を強くする、というのは定説である。さもなければ、ソ連軍が日本人非戦闘員に対して強制した行為は、許すまじきことであり、遺憾である。

新たな朝が明けた。朝食にソ連軍から、初めての黒パンが支給された。今は否応なく、何でも食べなければ飢えて倒れてしまう。ほどなく「集合！」の号令が掛かって、一隊は、牡丹江駅へ向かった。駅構内の引込線には有蓋貨物列車が待機していた。私どもは、戸

外に山積みになっている荷物を、列車の中に移動する仕事を命令された。荷物（大きな袋）の中味は分からない。肩に担いで、列車まで三〜四十メートルを歩くのが結構きつい仕事であった。喘ぎ喘ぎ運んだ。警備兵が、怠慢な動作をする者を見付けると、「ダワイ！ ブイストラ」と威嚇する。これらおびただしい数量の荷物は、関東軍が敗走するに当たって、運搬できずに放置したものばかりである。

仲間のうち一人が、作業中に腰がふらつき、重心を失って、肩から荷物を落としてしまった。縫い目が切れて袋の中から真っ白な砂糖が飛び散り、辺り一面を覆った。近くに並んでいた者は、一斉に駆け寄り、口いっぱいには砂糖を放り込んだ。素早くズボンのポケットに入れる者がいる。警備兵が駆けてきて、夢中になっている数人をどなりつけ、作業に復帰させた。数十分後に再び、落下事故が発生した。今度はリングゴである。たくさんのリングゴが転がって、広範囲で恩恵を受けた。休憩時間に、腰を下ろして休んでいる婦人兵士数人を見掛けた。珍しく思い興味を感じたので、彼女たち

の輪に近づき、一人の兵士に話しかけてみた。「ドーブリジュニー、タバーリシ。スコリーコプレーメニ、セイチャス」彼女は、にっこりと微笑して、自分の腕時計を見ながら答えてくれた。時刻は三時過ぎであった。作業は夕暮れ前に終了した。この日は作業中に思わぬ収穫にあり付いて、楽しい一日であった。

ふと、退屈凌ぎに周辺を探索してみたい気持ちになり、山内五郎君を誘って歩き始めた。ピルの敷き地は結構な広さである。塀の随所が被弾のために倒壊している。と、暗闇の向こうから、警備兵の誰かが鋭く、短く聞こえた。「クトー、エト。ストーイ！」暗闇の中に、りりしい顔つきで、自動小銃の銃口を二人に向けて立っている警備兵を確認した。あわや、射殺されるのでは、という殺気を感じた。何か言葉を返さなければいけない、ととっさに思った。「ドーブリベーチェル、タバーリシ。メニャーザブート、タイラ。ヤー、ハチュー、イエスチ、フレップ、パジャールスタ」精いっぱいのお愛想を表しながら、本音を警備兵に伝えた。彼は二人のことを怪しい者ではない、と判断し

た模様である。彼は二人を連れて、厨房らしき建物へきた。外で待っていると、彼がロシアパンを二斤ほど持って現われた。二人は最大級の謝辞を繰り返して、その場を急ぎ足で去った。学院生たちと分け合って食べたあのパンの味は忘れられない。

翌日は引き続き、牡丹江駅で荷物の積み替え作業を行った。単調な労働作業の繰り返しである。胃が絞られるような恐怖を感じた昨夜の体験とは違って、この日は平穩無事に過ぎた。

牡丹江市に連れてこられてからは、劣悪な食、住環境の中で、毎日を労働に明け暮れる日が続いた。かれこれ、二、三週間が経過したある朝、作業に出発しようとする一隊に対して、意外な指令が下った。本日は作業を取り止めて、自分の身の回りをまとめ、列車に乗り込むようにというのである。すかさず周囲から、いろいろな取り沙汰が流れて走った。「いよいよ、ソ連本土送りだ」「労働の報酬として、日本送還が許されるんだ」どの話にも根拠はない。列車は往路に乗り込んだ物とは違って、有蓋貨物列車である。列車は動き

出した。

明らかに北西に向かって戻っているのである。列車の中では、無理な姿勢で長時間座っているので、体のあちらこちらに痛みを感じる。何時間かを走り通して、原野が広がる殺風景なところに急停車した。用便のために十分間の休憩が与えられた。

車内の小窓から差し込んでいた明かりが、徐々に暗くなり、夜の到来を告げている。牡丹江駅を出発してから、かれこれ七、八時間は走ったように思われる。時速四十キロの速力で走り通したと仮定してみると、哈爾濱はもう間近に迫っていることになる。列車内の小窓に近寄り、外部の様子を窺って見るが、皆目わからない。焦燥感に駆られ始めているころ、列車が急停車した。

ドアを明けて、間近の人から順次、地面に飛び下りた。背丈ほどに伸びた雑草が、一面に生い茂っている。先方には、都会の明かりが煌煌と輝いている。ここはまぎれもなく、哈爾濱市郊外である。と確信した。小便をすませると、私は山内五郎君に相談を持ち掛けた。

一緒にここから逃げて、哈爾濱市外へ戻ることで一致した。草藪を掻き分けながら走り抜けて、間もなく市街地の道路に出た。私は彼に誘われるままに、彼の親戚であり学院の大先輩でもある人の家を尋ねた。

終戦の日から、既に一カ月が経過した。翌朝、目を覚まし洗面を取り急ぎすませる。無我夢中で生き抜いてきた数週間の疲労が、ひと晩の熟睡によって解消された。久しぶりに白米飯に味噌汁、漬け物など、心尽くしの朝食を御馳走になった。懐には一銭の金も無く、まったく動きが取れないので、二人は職業紹介所を尋ねることにした。

日雇いの仕事なら、どんなことでも構わない、と思っていた。街は平常の活気を取り戻し、日本人も歩いていた。路頭には中国人の屋台店が並び、金さえ所持していれば、お腹をすかすことはない。幸い、哈爾濱駅構内の清掃作業という単純な仕事が見付かった。その日は、早速、夕刻まで働いた。線路脇に落ちているゴミを拾い集める、という作業である。

ソ連軍の婦人部隊や少年兵を乗せた列車が停車して

いるのを見掛けた。その日に耐え難い屈辱を味わった。少年兵が大勢窓から顔を出してしゃべっている。その中の一人が、リングゴを口一杯に頬張って、私の顔に向けてパッと吐き出したのである。私は暗黙して、じっと耐えた。遺憾である。

山内五郎君の親戚の家では、私どもの外に、北満から避難してきた家族が同居していた。したがって、あまり長い滞在は許されないと覚悟していた。私は両親、妹が待っている撫順市へ移動する方法と機会を模索していた。一カ月ぶりに、その夜はお風呂を使わせていただいた。溜まった垢をこすり落とし、肩から熱い湯を流すと、体がすっと軽くなり、生きている喜びを実感した。

翌日、先輩から吉報を聞いた。幸運が巡ってきたのは驚嘆した。瞬時には信じられなかった。哈爾濱在住の満鉄社員一千人（家族を含む）が、当地において失業したために、大挙して満鉄撫順炭礦に転動することになった。移動の道中を安全に守るために、ソ連軍ゲーペーウ警備兵数人が、当列車に同乗する。ついて

は、ロシア語通訳を二人配置しなくてはならない。渡りに舟、とはこのことである。人間万事塞翁が馬である。

九月十八日、早朝。先輩の家ではわざわざ早起きして朝食の支度、加えて昼食までこしらえていただいた。私どもは指定された哈爾濱北駅に集合した。既に大勢の日本人が、リュックサック、トランク、ポストンバッグなどの荷物を持って集合していた。十二両編成の真ん中に、警備兵が乗車する貨車が連結されている。警備隊長のカピタン（大尉）に自己紹介して乗車した。やがて日本人の責任者が、全員集合した旨を報告にやってきた。列車は予定の時刻を少し遅れて動き出した。夕暮れが迫るころ、列車は撫順駅に到着した。道中では殊の外、平穩に進行することができた。私どもは拍子抜けするほどである。警備兵が、マンドリンを演奏して歌うロシア民謡などを聞き、楽しく時を過ごした。

撫順市街は十万人を超す避難民が、各地から漂流の果てに到着し、そのまま在住していた。市内の学校を

すべて解放して、避難民の宿舍に割り当てている。私は山内五郎君を連れて自宅へ帰った。両親や妹は、私が無事に戻ったことを目の当たりにして、涙を流して喜んだ。兄は東京の大学から学徒出陣で応召され、満州の関東軍に配属されたまま、音信不通になっている、と父から聞かされた。翌朝は父が勤務している撫順炭礦工事事務所を訪問し、二人の仕事を探してもらうことにした。即座に仕事に就くことができた。職、住、食を確保して、ようやく安堵した。

日中でも、零下を越す極寒の季節が近づいていた。十万人を超える避難民は、飢えと寒さと伝染病などによって、次々と倒れていく。そのころ、撫順市街の支配は、ソ連軍から中国人民解放軍に引き継がれ、治安は次第に落ち着きを取り戻していた。ソ連軍は撤収に紛れて、工場の機械や装備を大量に運び去った。撫順市街の支配者は、やがて、解放軍を追い出して、国民政府軍に取って代わった。

私の家はその都度、一部の部屋を軍幹部の宿舍として提供させられた。そのころ、山内五郎君は職場で知

り合った、私の中学校の後輩のA君の家に引っ越して行った。A君の父親は応召されたままで、留守家庭である。母親と二人きりの生活のため、不安と寂しさを払拭する術もなく、ひたすら悩んでいた。山内五郎君が彼の境遇に同情して、一緒に住むことに同意したのである。

三、故国への引揚げとその後

一九四六（昭和二十一年）七月、一家は多くの辛酸をなめ、壺蘆島こらうとうから船に乗り継ぎ、舞鶴港へ送還された。一家は大分県宇佐郡四日市町に住む母の妹を頼って訪ねた。第二の人生の出発である。

父と私は翌日から職探しに駆け回った。一年間を別府市内で、住み込みで働いた。その後、縁者を頼って下関市に移住することになる。下関市では新聞の求人広告欄を見て、下関地方貯金局に就職した。幸い、父と妹が同時に就職した。給料が安くて生活は苦しかった。半年が経過したある日、市街で偶然中学校の同級生に出会った。東京から下関に遊びにきているところである。一週間後に、彼が東京に戻る前日に貯金局に

尋ねてきた。そのとき、彼から「一緒に東京へこないか」と熱心に誘われた。私は両親の快諾を得た上で、彼に付いて上京した。

東京では、神様の加護と思われるような幾つかの巡り合わせがあった。上京後二日目に、中学校の三年先輩に当たる吉田正則氏に新宿の町で出会った。彼に説得されて法政大学に編入学することになる。外務省にハル濱学院の先輩である合志洋氏を尋ね、在学証明書を発行していただいた。これを法政大学学務課に提出し、入学試験免除と特待生扱いの授業料免除などの恩典を獲得することができた。条件として体育会スケート部に所属し、アイスホッケー選手として活躍することが付加された。

一九六〇年四月、二、三度の転職の末、JUKI株式会社家庭製品事業部に就職した。総合縫製機器製造販売のメーカーである。一九八七年四月、私は当社の山岡社長にハル濱学院の出身であることを認識されることになる。即刻、社長から栃木県大田原市に新設されている那須研修センター所長として就任するよう、

社命が下った。六万坪の敷地には工業用ミシン製造工場と、那須研修センター、体育館などの設備が整っている。研修の場所としては、最適の環境と設備を有する業界トップの地位を誇っている。

私が当地に着任してから、早速、旧ソ連のアルメニア縫製工場の技術者十人が研修にやってきた。当研修センター開設以来、初めてのロシア人研修生の入所である。以後、モスクワ、ウクライナ、バルト三国、カザフスタン、モンゴルなど、ロシアの各地方から女性も交えてやってきた。彼らの滞在中は、会社にとって重要な顧客に対して、サービスに努めなくてはならない。私は着任した当日、本屋に走りロシア語、中国語、英語の辞書、文法書、会話読本を買いそろえた。研修生は中国、アメリカ、ドイツ、イタリア、東南アジアなど、世界の主要各地から頻りにやってきた。

一九九〇年八月、私は妻を伴って中国旅行に出掛けた。実は中国から研修にきた人たちが帰国した後、山岡社長を通じて平所長夫妻と是非中国に寄こしてくれ、と要請が再三にわたっており、実現するに至ったので

ある。十日間の官費旅行である。北京、上海、大連、遼陽（遼陽）、沈陽（瀋陽）、撫順など、縫製工場の所在地、研修生の在籍地を訪問して回った。各地で大歓迎を受け、その都度涙を流した。撫順の街で、かつて一家が平和な日々を送った家屋の前になったとき、感慨無量であった。

【執筆者の横顔】

平勉氏は大分県の出身。東洋一の露天掘り炭鉱満州国撫順市に育つ。撫順中学校卒業。昭和二十年四月満州国立大学哈爾濱学院に入学。炭鉱の街に育ち、荒くれ炭鉱夫が相手の父親の血を受け継いでか、平氏は天性豪放磊落の熱血漢で、情に厚く、意気投合すれば十年の知己のごとく清濁合わせ飲む風貌がある。優れた体躯と体力を持ち、スポーツも万能であった。

楽しい全寮生活も四カ月半で終戦になり、学院長夫妻・学監ご一家の自決により、指導中枢を失ったものの、学生たちは何らかの最終的な全体的行動指示があるものと思つて、三三五五ハルピン市内に知己を頼つ

て分散逼塞した。平氏はある程度の危険を覚悟の上で実行すれば、父母のいる撫順に帰還できたはずであるが、親友たちと別れるに忍びず、指示待ちの気持ちもあつて、あえなくソ連軍の日本人狩りに遭遇し拉致されてしまう。

終戦後の満州の大都會でハルピンほど徹底的に大規模な日本人狩りが行われた所はない。日本兵脱走捕虜の員数合わせのための予備として実施との説もあるが、定かなことは不明である。後日、この事はハ牡丹江死の行進として有名になったが、スラブ民族の多くの戦史では今昔を問わず、非戦闘員に対するこのような例があるので、彼らの常套手段なのであろう。その間、男たちのいなくなったハルピンで、婦女暴行・略奪をほしいままに行っている。

このような苦難にあつても、平氏の行動は人間味と友情に溢れている。幸いにして無事ハルピンに戻り、撫順にも帰り着いて、やがて日本に引き揚げて落ち着くのだが、平氏の人格のゆえか、友人・上司に好まれて、帰国後の進学も先輩の世話で、無試験、学費免除

で法政大学卒業。勤務した憐JUKIでも、たまたま社員食堂で同席した、現社長山岡建夫氏との雑談から研修センター所長に抜擢され、ロシア、中国の研修生とも親交し、定年後も更に五年勤め上げた。

まさに平氏の重厚な人格の賜である。現在六十九歳。秦野市に健在である。

(岐阜県引揚者団体連合会)

理事長 川村 一正)

回想記

山梨県 坂本 滋子

私は、一九二三年(大正十一年)一月三日、東京で誕生。七十四歳です。振り返ってみますと、私の生涯の基、方針は東京での十五年間、旧満州国で暮らした十年間の生活、この二十五年で決められたように思います。殊に後の十年間は青春時代になり、影響は更に大きいと言えましょう。異国での思い出は鮮明に美し

く、また、悲しみさえも懐かしく浮かんでまいります。昭和二十年。余りにも大きな変動の年でした。八月十五日は、日本の終戦記念日であり、日本人のどれもが悲嘆にくれた長い一日でございました。私どもの年代の者は、毎年八月に入ると、そろそろその日のことを意識して落ち着かなくなります。話はいつか敗戦の苦労話になり、また、お互いに親近感を持つきっかけになったりもいたします。

通河事件

四月の初めのころでした。朝六時前、鏡台に向かってみましたら、「ボン・ボン」と何か耳慣れない音が聞こえてきました。間もなく人が訪れる気配があり、夫は「ちょっと会社の方に行ってくる」と緊張した面持ちで身支度して出掛けて行きました。会社は、地続きで高い塀を巡らした中にあります。

私どもは、昭和十九年の五月に佳木斯で挙式。夫が婚約後、通河出張所勤務になってましたので、松花江を船で遡って、船中二泊の旅が、新婚旅行のようなものでした。この川は、夏は船が運航しますが、冬期間